

## 幸福を求めてⅡ

浄泉寺住職 山口範之さん

### 【第二、自分の持ち物なしと(うい)】

人々は物に執著しています。オギャーと生まれた時は、物に対する執着も少ないのでしょうか、物心がつき始めた時より、親も教えますし、白からも身につけていくのでしょうか、私にも二人の子供がいますが、今長女は五才、次女は二才です。そんな小さな娘が、「これは、私の。」と、言い合つて、よく喧嘩をしています。二才にでもなると、はつきり自己主張するには驚かされます。小さな時から訓練をするのですから、物に対し執著する心が強くなるのは、あたりまえと言わねばなりません。

世間を眺めますと、自分の土地に隣の家が入りこんで来たとか、家を借金の抵当で取られてしまったとか、一人息子を、相手の家へ取られたとかで苦しんでいますし、自分の持ち物が多い故に、盗まれないだろうかと心が休まらず、又、死んだ後の事まで考えて、いかに子供に相続すべきかと苦悩しています。あげくのはてには、その人の死後子供達が自分の物であると権利を主張し合い、兄弟喧嘩をして苦しんでいるしまつです。

結婚をして間のない頃のことでした。家内のお父さんが、家へ遊びに来られまして、お茶を飲みながら、「確か、この辺に本田屋という旅館があつ



たと思うのですが、御存知でしょうか？」と尋ねるのです。

私の父が、「はい、良く存知しております。この寺の入口の所で、家内が仏壇店をしておりますが、あの建物の立っている所が、元の本田屋の跡地です。終戦後私が買ったのですが、なぜですか？」と答えますと、驚いた様子で、そんな事が本当にあるのかと思えるような不思議な事を話し始めました。

「私(家内の父)は、東京でN家の長男として生まれました。しかし、父と母との間に折り合いがあわず、私達を残して母は実家へ帰っていきました。その後、父は後妻を貰い、二人の間に数人の子供が生まれました。子供が出来ますと、当然、自分の実の子に、跡を継がせようといたします。当時、新宮に父の弟がおりまして、その人には子供がおりませんでした。そこで、先妻の子供である私を養子に出したのです。今で言う体裁のいい追い出しにかかったのです。

しかし、不思議なものです。その私を追い出した義母は、実は本田屋の一人娘だったのです。

私も今知って驚いたのですが、じゃー、私を追い出した義母の実家へ追い出された子供の娘が、入って来たということになるのですね。」「因縁とは、不思議なものです。自分が取つたと思つて喜んでいても、周り回つて違つた形で取られていたということでしょうか、それを思うと、本当に私の持ち物なしということですね。」と話した事がありました。

法律では、この土地は誰某の、この家は誰のと記されていますが、しかし人の持ち物は、一時の預

り物であります。なぜなら、自分の持ち物でない証拠に、死んだ時それを持つていった人は、一人もいません。本当に自分の家や土地なら、持つていくでしょうし、自分の子供や妻であると言ふのなら死んだ時、喜んで付いて行きそつなものですが、そんな話も聞きません。一時の借り物を自分の物と思ひ込む事で、より人間は苦しんでいると言ふことでしょうか。

### 【第三、他力と(うい)】

無我とは、他力ということであろうと思います。世では他力ということの間違つて考えられているようです。何か、他力と聞くと、人をあてにして、自分は何もしない怠け者の事のように、思つている人が多いようですが、決して、そのような意味ではないのです。

他力とは、良い事はどんどん自らしなければならぬ。しかし、それを「おれ我してやった」と惚れるのではなく、良い事のできるはずのない私が、もしも人に対して良い事をしたのなら、それは私の力ではなく、阿弥陀様の願(本願)が、しぶとい私の心に、到り届いて、そうなさしめられたのであると、総て、仏様の働きかけによると感謝する心を他力というのです。

『他力とは本願力是なり。』とあるように、私や貴方の力という意味ではなく、阿弥陀如来の本願(総ての人を平等に差別なく救い取りたいという大なる願い)という意味なのです。即ち、お陰様と、目に見えない大きな働きかけを、自らの上に見出していくところに他力があるのです。

又さらに、他力とは、とかく人間は自らの力で

生きてると曰惚れがちですけど、静かに考えますと、自分の力などは微々たる物で、総てといつていい程、多くの恵みによって生かされているということに気づかされます。水も、空気も、太陽も：どれも総てが頂きものであります。例えば、空気にしましても、私が出す二酸化炭素を、草木が酸素にして返してくれます。

その酸素を呼吸し二酸化炭素にして、草木に返してあげるといふように、知らされずと、草木がなくなりますと、私は生きて行けないということになります。草木と私は共存しているということです。総てがこの様に、自然と私は一体であるということでもあります。

又、食べる物も、かりに自分一人で生きていけるといふのなら自分で総て造り出さなければなりません。自分の金で買つたのだから自分の力で生きていけるといふ人がいるかもしれませんが、いくら金があつても、誰かが造ってくれなければ買えませんし、アフリカのように飢饉にでもなれば、いくら金を出しても何も手に入れる事はできません。

そう思うと、多くの人がそれぞれの仕事をしてくれているお蔭で、私達は生きていけるという事でしょうか、そのお蔭を感じえない所に、多くの苦悩が生まれて来るのです。

以上のように、邪見のサングラスを掛けて物を見ますから、無常、無我なる本當の事が見えなくなり、いつまでも苦しみから解放されないということになります。

## (B)原因が逆さまに見える(顛倒の見)

苦しみの原因が、逆さまに見えるとはどういふ

意味かというとな、それは、苦しみの原因を自分以外の他にあると思ひこむ、責任の転嫁を意味しています。責任の転嫁とは、わかりやすく言いますと、例えば、子供が前を見ずに走っていて、突然柱に頭をぶつけたとします。その時、親が泣き叫ぶ子供を抱えて、「オーオー痛かったね。ここか、柱のここ打ったのか、本当にこの柱は悪いね、ジャー、柱を怒つてやるからね。」と柱をボンボンと叩いているのを見かけることがありますが、これはいふのです。

柱は、動かないのです。そこに立っているだけです。子供が頭をぶつけて痛いのは、どこに原因があるかと言へば、子供が前を見ずに走ったことにあるのです。悪いのは前を見ずに走った子供自身が悪いのです。原因は子供にある。それを柱がそこに立っていたから柱が悪いのだと言わんばかりです。一見、笑い話してみたいですが、これを責任の転嫁、あるいは顛倒の見ということです。これらは、総て、邪見の為せる業です。

人間は、誰でも、【見取見】<sup>けんしゅけん</sup>といつて、自分が一番可愛く又自分が一番正しいと思つています。

「私は、自分が一番正しいとは考えていません。」と、

あるいは言われるかも知れませんが、しかし、その見方で見ている証拠に、人を批判しますし、評価もし、又人と喧嘩もいたします。

夫婦喧嘩にしましても、お互いが、自分の言い分は、正しいという所から起り

ます。もしも、どちらか一方が(いや、自分の考えは、間違つている。相手の方が正しいようだ。)と気づけば、喧嘩になりません。

又さらに、この見取見には、【身びいき】<sup>みびいき</sup>とも言いましようか、自分の愛する者、近い者、(主人、子供、兄弟、...)ほど、可愛いという思いがあります。他人の子供も同じ様に愛せよと言われても、やはり、自分の子供が一番可愛いですし、子供同士喧嘩でもしているとな、自分の子供に加勢しようという気持ちが出て来るのも、あるいは、何時もは、喧嘩をしている兄弟でも、いざ他人と喧嘩にでもなれば、兄弟をかばい助け合いますの、この見取見から起りまます。

さらに邪見には、【戒禁取見】<sup>かいこんしゅけん</sup>という見方があります。これは自分のしている事が一番正しいと思つて考え方です。宗教の世界でも、本来の目的は、総ての人間が幸福になることであるのに、その方法において、お互いが、自分達のやり方、教えが最高であると主張し合い、罵りあい、いがみ合い、ひどくなれば戦争をして殺し合うということが起るのも、この心からです。

見取見、戒禁取見という邪見の見方が、苦しみの原因を他の物に思わせ(惑)、その苦しみから逃れるため(業)ますます(苦)に落ちいつてしまつていふのです。

では、どのような責任の転嫁により苦しんでいるのでしょうか。

【第一】相手や、相手をとりまく友達や世の中の責任とする。

【第二】目に見えない物の責任とする。

【第三】靈的な物の責任とする。( ) ( ) ( )

